

## 保育職志望の女子大学生における本来感と 自己肯定感の検討 2

—被服行動が本来感と自己肯定感に及ぼす影響—

An Examination of the Sense of Authenticity and Self-Affirmation among Female College Students Who Wish to Work in Child Care 2 : The Effect of Clothing Behavior on Such Self-Concepts

折 笠 国 康\*

Kuniyasu Orikasa

This study focused on the Clothing Behavior of female college students who wanted to work in childcare after their graduations from college, and examined its influence on their sense of authenticity and self-affirmation. These are considered as similar self-concepts.

The subjects were 231 female college students who are taking childcare courses. The data was analyzed by the multiple linear regression analysis with the forced entry of all possible models.

Results indicated that "I'm careful about putting on such clothing as will conceal my physical complex." had a significant negative impact on their sense of authenticity and self-affirmation, while "I'm careful about putting on such clothing as will accentuate my favorite physical parts." had a significant positive impact on their sense of authenticity only. It was confirmed that although "sense of authenticity" and "self-affirmation" are positively correlated, they have different characteristics.

### I 問題と目的

折笠<sup>1)</sup>では、幼稚園教諭、保育士や保育教諭といった保育職の従事者(以下、保育職従事者)を取り巻く著しい変化やストレスフルな様子が見られる昨今の厳しい状況について言及されている。また、こうした状況に鑑み、保育職従事者のストレスマネジメントや耐性にかかわる研究の必要性が示唆され、学生時代に予防的な観点においてストレス耐性に長けた適応的な自己概念を獲得しておくことの重要性について言及されている。具体的には、伊藤・小玉<sup>2)</sup>により「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義され、大学生の心理的well-beingに正の影響を及ぼし、自律性の促進に貢献することが示されている自己概念であ

---

※ 郡山女子大学短期大学部 幼児教育学科

る本来感 (Sense of Authenticity) と、心理学的研究で適応的な自己概念として扱われることの多い自己肯定感に焦点が当てられ、また、保育職志望の学生の青年期という発達段階を考慮し、青年期以降における対人関係上の大きなライフイベントの1つである恋愛に着目し、持ち得る恋愛イメージが、適応的な2つの自己概念であり自分自身に感じる本当らしさの感覚である本来感と自己肯定感それぞれに与える影響が検討されている。その結果、恋愛イメージの「束縛・独占」が有意に本来感と自己肯定感に負の影響を与え、「大切・必要」「成長」が有意に自己肯定感に正の影響を与えることが示された。また、「本来感」と「自己肯定感」は正の相関関係にありながら、それぞれ異なった特徴を持つことが示唆されている。

本研究は、保育職従事者のストレスマネジメントや耐性にかかわるさらなる知見を得るために、学生時代に予防的な観点においてストレス耐性に長けた適応的な自己概念である本来感と自己肯定感を獲得しておくことに対する折笠<sup>1)</sup>を補足する新たな知見を得ることを目的とした。折笠<sup>1)</sup>では、青年期という発達段階を鑑み、対人関係上の大きなライフイベントの1つである恋愛に着目した。本研究では、高田<sup>3)</sup>が示唆するように、女子大学生にとって被服行動は自分らしさとは何かという本質的なきっかけとなり、アイデンティティと関連するものであるとの示唆を基に、保育職志望の女子学生の被服行動と適応的で好ましい自己概念である本来感と自己肯定感との関係性に着目することとした。鷺田<sup>4)</sup>は、服装は個人の人格を具体的にかたちづくっているとし、さらに、神山<sup>5)</sup>は、服装や外見は、青年期の危機の状況を乗り越えてアイデンティティを確立するうえで、少なからず重要な働きをすることを示唆している。藤原<sup>6)</sup>は、被服が自己概念の発達に大きく作用することを示唆する、M.S.Ryan<sup>7)</sup>、M.J.Horn and L. M.Gurel<sup>8)</sup>等の先行研究をまとめ、藤原<sup>9)</sup>において、E.N.Reeder and M.F.Draker<sup>10)</sup>といった主に欧米の研究を基に、自尊感情の高さと被服の関心度との関連性が検討された。その結果、高い自尊感情をもつ女子学生は、その個性を強調するような被服の用い方をし、自尊感情の低い人は社会的受容、慎重さを重視した被服行動をとる傾向があることを示唆した。

これらのことから、伊藤・小玉<sup>2)</sup>が示唆するように、中核的な自己によって自身が機能している感覚から得られる最良の自尊感情 (Optimal self-esteem; Kernis<sup>11)</sup>)、自分が自分でいられることから自然に得られる本当の自尊感情 (True self-esteem; Deci & Ryan<sup>12)</sup>) と概念的に近似である本来感と保育職志望の女子学生の被服行動との何かしらの関連が予測される。また、折笠<sup>1)</sup>で示唆されているように、心理学的研究で適応的な自己概念として扱われることが多く、本来感との高い正の相関が確認されていることから、保育職志望の女子学生の自己肯定感と被服行動との何かしらの関連も予測される。山中<sup>13)</sup>は被服行動による自己形成に関わり、理想的自己に近づくための被服行動による印象管理が自己実現欲求を支えるとの考えに基づき、被服行動の工夫と被服の象徴的表現として被服による印象管理に関する尺度を作成した。山中<sup>13)</sup>では、大学、短大、専門学校の学生を対象に調査が実施され、異性に人気があると自覚する層は

より気を遣い、そうでない層よりも身体好きなことを強調するといった積極的な被服行動を行うことが示唆され、被服行動は他者との関係に対する意識とも関連することが示唆されている。すなわち、本来感や自己肯定感が高いことと身体好きなことを強調するといった積極的な被服行動を行うことの関連が予測される。そもそも、高田<sup>3)</sup>が指摘しているように、服装は着る人のアイデンティティを伝えるためのコミュニケーションの方法であると考えられる。山中・川端<sup>14)</sup>は、被服が非言語コミュニケーションの1つであり、対人関係及び感情にも影響を及ぼし得ることを示唆するC・L・クラנק<sup>15)</sup>、水島<sup>16)</sup>といった先行研究を基に、コミュニケーションツールとしての被服の役割を明らかにしている。

本来感は、伊藤・小玉<sup>2)</sup>により「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と操作的に定義され、自分自身を対象とした自己内価値基準を大切にする概念ではあるが、これは自己中心的で他者とのかかわりを大切にしないといった自己概念ではないことが考えられる。伊藤・小玉<sup>2)</sup>では、本来感は自尊感情からは確認できなかった積極的な他者関係に対して正の影響を与えることが示唆されている。これ等のことから、本研究における本来感の定義も伊藤・小玉<sup>2)</sup>に準じ、また、自己肯定感の定義は、田中<sup>17)</sup>による、「自己に対して肯定的で、好ましく思うような態度や感情」との定義に準じることとした。

以上より、本研究では、次の2点を検討することを目的とする。一つ目は、被服行動の工夫と被服の象徴的表現(山中<sup>13)</sup>)、すなわち、被服行動が適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに与える影響を検討することである。二つ目は、被服行動との関連を基に、適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感との差異について検討し、概念の弁別についての新たな知見を得ることである。以上より本研究の仮説を具体的にまとめると、自分の身体好きなところを強調するような衣服着用を心がけていることが、適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに正の影響を与えること、自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけることで適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに負の影響を与えること、さらに本来感と自己肯定感は正の相関関係にありながら、折笠<sup>1)</sup>等の先行研究と同様に、それぞれ異なった特徴を示すことが予測された。

## Ⅱ 方法

### 1. 調査対象者

東北地方X県の私立短期大学に在籍し、保育士、幼稚園教諭を志望する女子学生245名(1年119名、2年126名)を対象に回答を求めた。欠損値があるものなど回答に不備があるものを削除し、合計231名(1年112名、2年119名)の回答を分析の対象とした。

## 2. 調査内容

質問冊子は、①本来感尺度(伊藤・小玉<sup>2)</sup>)の7項目、②自己肯定感尺度(田中<sup>17)</sup>)の8項目、③被服による印象管理に関する尺度(山中<sup>13)</sup>)の13項目から構成された。折笠<sup>1)</sup>で用いたもので③被服による印象管理に関する尺度(山中<sup>13)</sup>)を分析の対象としたものである。具体的な質問は以下のとおりである。

- ① 本来感尺度 伊藤・小玉<sup>2)</sup>が作成し、1因子構造が確認されている。「いつも自分らしくいられる」「自分のやりたいことができる」「いつも自分を見失わないでいられる」など7項目で、「とてもよくあてはまる」～「全くあてはまらない」までの5件法。
- ② 自己肯定尺度 田中<sup>17)</sup>が作成し、1因子構造が確認されている。「私は、自分のことを大切に感じる」「私は、いくつかの長所を持っている」「私は、物事を前向きに考える方だ」など8項目で、「とてもよくあてはまる」～「全くあてはまらない」までの5件法。
- ③ 被服による印象管理に関する尺度 山中<sup>13)</sup>が作成し「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている」「自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている」「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である」等、13項目を採用した。「とてもよくあてはまる」～「全くあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。

## 3. 調査実施手続き

調査に関する倫理的配慮等について、学科主任からの了承を得た後に調査を実施した。回答はすべて無記名で行われ、学生によりランダムに回収され、個人が特定できないように配慮した。また、質問への回答は自由意志であり、成績には関係しないこと、調査の趣旨について文章を通して説明を行い、学生の同意を得て実施された。

## 4. 調査実施期間

2021年の9月から10月にかけて実施した。

## 5. 分析ソフトウェア

本研究の分析は、IBM SPSS STATISTICS 26 を利用した。

# Ⅲ 結果

## 1. 本来感尺度の構造、信頼性の検討

折笠<sup>1)</sup>において、本来感尺度の平均および標準偏差を算出し、平均±1SDの値を確認し、理論上限を超えた項目は確認されなかった。逆転項目の処理を行った後、変数間の相互関係を

観察することを目的に主成分分析を行った。その結果、第1主成分に.59以上で負荷していたため内的整合性が確認された。 $\alpha$ 係数は.85、折半法による相関は.74で、十分な信頼性が確認された。本研究においても折笠<sup>1)</sup>と同様に本来感尺度を6項目からなる一因子構造の尺度として用いて以後の分析を行うこととした。

## 2. 各尺度の2変量相関

本来感、自己肯定感、被服による印象管理に関する尺度について、必要に応じてそれぞれ回転項目に対する処理を施した後に、各下位尺度に含まれていた項目の平均を算出し、各尺度得点とした。被服による印象管理に関する尺度の記述統計量をTable 1に示した。

また、分析に必要とされるそれぞれの相関を算出した(Table 2)。その結果、本来感と他の尺度との関連については、自己肯定感( $r = .61, p < .01$ )、5-1「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。」( $r = .22, p < .01$ )、5-3「自分の身体の好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」( $r = .24, p < .01$ )、5-4「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」( $r = .24, p < .01$ )、5-8「自分自身のイメージを変えるために、衣服を工夫することがある。」( $r = .14, p < .05$ )、5-9「憧れのイメージの衣服を着用するとそのイメージに近づいた気がする。」( $r = .14, p < .05$ )、それぞれに有意な正の相関が認められ、他の尺度とは有意な相関は確認されなかった。自己肯定感と他の尺度との関連については、5-1「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。」( $r = .30, p < .01$ )、5-3「自分の身体の好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」( $r = .17, p < .01$ )、5-4「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」( $r = .35, p < .01$ )、5-7「衣服によって人はイメージを変えられると思う。」( $r = .24, p < .01$ )、5-8「自分自身のイメージを変えるために、衣服を工夫することがある。」( $r = .23, p < .01$ )、5-9「憧れのイメージの衣服を着用するとそのイメージに近づいた気がする。」( $r = .14, p < .05$ )、5-11「着用している衣服が気分に影響する。」( $r = .22, p < .01$ )、5-12「着用している衣服が振舞いに影響する。」( $r = .15, p < .05$ )と、それぞれに有意な正の相関が認められた。また、5-2「自分の身体のコンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。」( $r = -.15, p < .05$ )との間には、有意な負の相関が認められた。

Table 1 被服による印象管理尺度の記述統計量

		M	SD
5-1	毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。	3.78	.92
5-2	自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。	3.51	1.03
5-3	自分の身体好きなどを強調するような衣服着用を心がけている。	2.85	1.16
5-4	生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。	4.07	.89
5-5	他者からの好感度を重視する。	3.52	1.02
5-6	皆と同じような系統の服装がしたい。	2.67	1.03
5-7	衣服によって人はイメージを変えられると思う。	4.40	.73
5-8	自分自身のイメージを変えるために、衣服を工夫することがある。	3.99	.98
5-9	憧れのイメージの衣服を着用するとそのイメージに近づいた気がする。	<b>3.92</b>	.95
5-10	同じデザインの衣服を着用しても自分と他人では異なる印象になると思う。	<b>4.13</b>	.83
5-11	着用している衣服が気分に影響する。	<b>3.95</b>	1.04
5-12	着用している衣服が振舞いに影響する。	<b>3.68</b>	1.08
5-13	着用している衣服により周囲の人々からの自分に対する評価が変わる。	<b>3.65</b>	1.00

Table 2 各尺度間の相関係数

	本来感	5-1	5-2	5-3	5-4	5-7	5-8	5-9	5-11	5-12
自己肯定感	.61**	.30**	-.15*	.17**	.35**	.24**	.23**	.14*	.22**	.15*
本来感		.22**	n.s.	.24**	.24**	n.s.	.14*	.16*	n.s.	n.s.
5-1			.17*	.18**	.48**	.24**	.28**	.22**	.22**	n.s.
5-2				n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
5-3					.24**	n.s.	.30**	-.27**	.17**	.20**
5-4						.27**	.36**	.39**	.42**	.26**
5-7							.38**	.23**	.26**	.20**
5-8								.52**	.35**	.35**
5-9									.37**	.34**
5-11										.64**

\*p&lt;.05, \*\*p&lt;.01

### 3. 被服行動が自己肯定感に与える影響

被服による印象管理に関する尺度の下位項目のそれぞれを独立変数として、自己肯定感に与える影響を検証することを目的として、強制投入法による重回帰分析を行った。独立変数間の相関関係に起因して、多重共線性の問題が危惧されたため、VIF (variance inflation factor) の値等から多重共線性の問題の有無を判断することが重要である。したがって、重回帰分析を行う前に重回帰モデルに対して、多重共線性の診断のためVIFの値を求めた。その結果、VIFの値は10未満の値を示し (VIF=1.17~1.84)、多重共線性の問題はないと判断することができた。また、Durbin-Watson ratioは2.14であり、本分析の重回帰式の残差のランダム性も確認され



た。重回帰分析の結果、被服による印象管理に関する尺度の5-2「自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。」と5-5「他者からの好感度を重視する。」は自己肯定感に対してそれぞれ有意に負の影響 ( $\beta = -.17, p < .05$ ,  $\beta = -.13, p < .05$ ) を与えることが確認された。また、5-1「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。」、5-4「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」、5-7「衣服によって人はイメージを変えられると思う。」は自己肯定感に対してそれぞれ有意に正の影響 ( $\beta = .16, p < .05$ ,  $\beta = .22, p < .01$ ,  $\beta = .14, p < .05$ ) を与えることが確認された。その他の下位項目から自己肯定感に与える影響は確認されなかった。重回帰分析の結果をTable 3に示した。

以上の結果から、本研究においては、被服行動の中でも、自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけていること、他者からの好感度を重視することが保育職志望の学生の自己肯定感を低減させることが確認された。また、毎日の洋服のコーディネートに気を遣っていること、生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要であると思うこと、衣服によって人はイメージを変えられると思うことが、保育職志望の学生の自己肯定感を高めることが確認された。

Table 3 自己肯定感を従属変数とする重回帰分析結果

5-1	5-2	5-3	5-4	5-5	5-6	5-7	5-8	5-9	5-10	5-11	5-12	5-13	R 2
.16*	-.17***	n.s.	.22**	-.13*	n.s.	.14*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	.24***
*p<.05	**p<.01	***p<.001											

#### 4. 被服行動が本来感に与える影響

被服による印象管理に関する尺度の下位項目のそれぞれを独立変数として、本来感に与える影響を検証することを目的として、強制投入法による重回帰分析を行った。独立変数間の相関関係に起因して、多重共線性の問題が危惧されたため、VIF (variance inflation factor) の値から多重共線性の問題の有無を判断することが重要である。したがって、重回帰分析を行う前に重回帰モデルに対して、多重共線性の診断のためVIFの値を求めた。その結果、VIFの値は10未満の値を示し (VIF=1.20~1.78)、多重共線性の問題はないと判断することができた。また、Durbin-Watson ratioは2.09であり、本分析の重回帰式の残差のランダム性も確認された。重回帰分析の結果、被服による印象管理に関する尺度の5-2「自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。」は本来感に対して有意に負の影響 ( $\beta = -.13, p < .05$ ) を与えることが確認された。また、5-3「自分の身体好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」、5-4「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」は、本来感に対してそれぞれ有意に正の影響 ( $\beta = .22, p < .001$ ,  $\beta = .18, p < .05$ ) を与えることが確認された。その他の下位項目から本来感に与える影響は確認されなかった。重回帰分析の結果をTable 4に示した。

以上の結果から、本研究においては、被服行動の中でも、自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけていることが、保育職志望の学生の自己肯定感を低減させることが確認された。また、自分の身体が好きなところを強調するような衣服着用を心がけていること、おしゃれな服を着ることは重要であると思うことが、保育職志望の学生の本来感を高めることが確認された。

Table 4 本来感を従属変数とする重回帰分析結果

5-1	5-2	5-3	5-4	5-5	5-6	5-7	5-8	5-9	5-10	5-11	5-12	5-13	R 2
n.s.	-.13*	.22***	.18*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	.17***

\* $p<.05$       \*\*\* $p<.001$

#### IV 考察

本研究の目的は、保育職志望の女子学生の被服行動が適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに与える影響を検討すること、また、被服行動との関連を基に、概念として近似であると考えられる本来感と自己肯定感との差異について検討して概念の弁別についての新たな知見を得ることであった。

折笠<sup>1)</sup>により、本来感と自己肯定感の高い正の相関が確認されており、概念的な近似によるものであることが考察されている。その他、本来感と本研究で取り扱った各尺度との関連を確認するために、それぞれの尺度得点に対しての相関分析を行った。その結果、本来感と被服による印象管理に関する尺度との間においては、「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。」( $r = .22, p<.01$ )、「自分の身体が好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」( $r = .24, p<.01$ )、「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」( $r = .24, p<.01$ )、「自分自身のイメージを変えるために、衣服を工夫することがある。」( $r = .14, p<.05$ )、「憧れのイメージの衣服を着用するとそのイメージに近づいた気がする。」( $r = .16, p<.05$ )と、それぞれ弱い正の相関が確認された。自己肯定感と被服による印象管理に関する尺度との間においては、「毎日の洋服のコーディネートに気を遣っている。」( $r = .30, p<.01$ )、「自分の身体が好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」( $r = .17, p<.01$ )、「生活の中で、おしゃれな服を着ることは重要である。」( $r = .35, p<.01$ )、「衣服によって人はイメージを変えられると思う。」( $r = .24, p<.01$ )、「自分自身のイメージを変えるために、衣服を工夫することがある。」( $r = .23, p<.01$ )、「憧れのイメージの衣服を着用するとそのイメージに近づいた気がする。」( $r = .14, p<.05$ )、「着用している衣服が気分に影響する。」( $r = .22, p<.01$ )、「着用している衣服が振舞いに影響する。」( $r = .15, p<.05$ )と、それぞれ弱い正の相関が確認された。また、「自分の身体コンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。」( $r = -.15, p<.05$ )とは、弱い負の相関が確認された。



これらの結果を全体的に捉えた場合、自己肯定感は衣服といった自分自身にとっての外的な物に依存することで、自身の気分や感情に変化をきたす傾向が見られと考えられる。本来感では、自身の意思によって被服行動を統制しているとの見方ができる。これは、本来感は、「自分自身に感じる自分の中核的な本当らしさの感覚の程度」と定義されていることから分かるように、自己内価値基準を大切にしている自分自身にかかわる感覚であることから妥当な結果であると考えられる。こうした自己内価値基準と自己外価値基準の感覚が、本来感と自己肯定感との概念的な差異を論じる一つの視点であることが考えられる。

以上の相関分析の結果を基に、被服による印象管理、すなわち、被服行動を独立変数として、本来感と自己肯定感のそれぞれを従属変数とする重回帰モデルを構築し仮説の検証を行った。被服行動が自己肯定感に与える影響と被服行動が本来感に与える影響における特徴的な差異は、自己肯定感では「他者からの好感度を重視する。」からの有意な負の影響が確認されたことであると考えられる。これはまさに他者からの評価や承認を求めることと関連していることが予測され、前述のように自己内価値基準を大切にする本来感との概念的な違いの表れとして捉えることが出来ると考えられる。藤原<sup>6)</sup>では、他者からの評価を気にする程度の強い人は保守的な服装をしがちであることが確認されており、本研究の結果はこれらの先行研究の知見を補完するものであると考えられる。本来感では、「自分の身体の好きなところを強調するような衣服着用を心がけている。」からの有意な正の影響が確認された。これは、自分の好きな箇所に意識を持ち、また、自分の身体に好きなところがあることがポジティブな意識を生起させることに寄与すると考えられる。自分の身体に好きなところがあることが高い自尊感情に貢献することが考えられる。これは、自尊感情が高い人は個性を強調するような被服を選択することを示唆している藤原<sup>9)</sup>等の先行研究からも妥当であると考えられる。自分の身体の好きなところを強調するような衣服着用を心がけていることが本当の自尊感情を意味する本来感への正の影響を示唆した本研究の結果は、先行研究の見解にも符合するものであることが考えられる。また、「自分の身体のコンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけている。」ことは、自己肯定感と本来感の両方に負の影響が確認された。これは、自分の悪い部分に意識を持つといったネガティブな意識状態が適応的で好ましい自己概念には負の影響を与えることが確認されたと考えられる。

以上のことから、自分の身体の好きなところを強調するような衣服着用を心がけていることが、適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに正の影響を与え、自分の身体のコンプレックスを隠せるような衣服着用を心がけることで適応的な二つの自己概念である本来感と自己肯定感それぞれに負の影響を与えるといた本研究の仮説は、部分的に支持され、さらに本来感と自己肯定感は正の相関関係にありながら、折笠<sup>1)</sup>等の先行研究と同様に、それぞれ異なった特徴をもつ自己概念であることが確認された。

藤原<sup>9)</sup>では、自尊感情が低い人は仲間の規範に同調した被服行動になりやすく、他者がどう思うかを重視した被服行動になりやすいことが示されており、また、米国の高校生を対象とした研究ではあるが、自尊感情の高い人は着用している被服によって他者からの注目を集めることを気にしないという研究結果を報告している。ストレスフルな環境であることが予測できる保育現場でもたくましく就業するために、先行研究や本研究から得られた知見を勘案すると、被服行動について意識を持つことが有効であることが確認されたと考えられる。特に、学生時代にストレス耐性に長けた自己肯定感や本来感といった適応的な自己概念を獲得するためには、自身のコンプレックスに意識を向けるのではなく、自身の好きな部位を強調するような被服行動ができるような意識を持つことの重要性が示唆されたと考えられる。

## V 今後の課題

折笠<sup>1)</sup>でも示されているように、岡田・齋藤・中嶋<sup>18)</sup>は、保育士の職場環境ストレスナーについて、対人関係に起因する「上司との関係」、「同僚との関係」、「養育者との関係」、「多忙感」に対するコンフリクト認知の存在を示唆している。しかしながら、岡田ら<sup>18)</sup>が示唆するようなストレスナーを保育現場から直接的に取り去るような改善は現実的には考えにくい。そこで、保育職従事者自身のストレス耐性を高める方向で解決策を見いだすことは、ストレスフルであることが予測される保育現場の状況において、現実的で実現の可能性がある大切な視点であると考えられる。

本研究の示唆により、近い将来にストレスフルな状況に身を置くことが容易に予想される保育職を志望する女子学生の予防的で好ましい自己概念についての新たな知見が得られたと考えられる。具体的には、本来感と自己肯定感の概念的な差異について検討し、重回帰分析により被服行動と本来感、自己肯定感それぞれとの関連からストレス耐性や精神的な健康やwell-beingなどに寄与する方向性が確認できたと考えられる。しかしながら、決定係数や標準偏回帰係数の値が小さく、一般化され得る知見とは言い難いものである。また、本研究で取り扱った被服行動に対する個人の認知は、たとえ学生、青年期といった年代は同じものであったとしても、自身が身を置く地域性の違いなどによる環境要因についての考慮も必要になることが考えられる。こうした課題を考慮した上で、今後は媒介変数の検討や首都圏等のデータも含めた検討が必要であると考えられる。

## 引用文献

- 1) 折笠国康 2022 保育職志望の女子学生における本来感と自己肯定感の検討ー恋愛イメージが本来

- 感と自己肯定感に及ぼす影響一, 共生教育学研究, 10, 25-34.
- 2) 伊藤正哉・小玉正博 2005 自分らしくある感覚(本来感)と自尊感情がwell-beingに及ぼす影響の検討, 教育心理学研究, 53, 74-85.
- 3) 高田葉子 2013 アイデンティティとファッションの関連性についての考察, 戸板女子短期大学研究年報, 56, 3-13.
- 4) 鷺田精一 1998 ひとはなぜ服を着るのか, 日本放送出版協会
- 5) 神山進 1990 衣服と装身の心理学, 関西衣生活研究会
- 6) 藤原康晴 1986 女子大生の被服の関心度と自己概念および自尊感情との関係, 家政学雑誌, 37, 493-499.
- 7) M.S.Ryan 1966 Clothing a Study in Human Behavior, Holt, Rinehart and Winston Inc., New York, 85
- 8) M.J.Horn and L.M.Gurel 1981 The Second Skin, 3rd ed., Houghton Mifflin, Boston, 136
- 9) 藤原康晴 1982 女子大生の被服の関心度と自尊感情との関係, 家政学雑誌, 33, 548-552.
- 10) E.N.Reeder and M.F.Drake 1980 *Home Econ. Res. J.*, 8, 339
- 11) Kernis, M. H. 2003 Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry*, 14, 1-26.
- 12) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy : The basis for true self-esteem. In M.H.Kernis(Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem*. New York : Plenum. 31-46.
- 13) 山中大子 2006 恋愛と被服行動に関する研究ー被服による自己形成と他者との関わりー, 繊維製品消費科学, 47, 640-645.
- 14) 山中大子・川端博子 2006 恋愛と被服行動に関する研究, 埼玉大学紀要 教育学部(人文・社会科学), 55, 63-72.
- 15) C・L・克蘭ク 1984 ファースト・インプレッション, 有斐閣
- 16) 水島恵一 1983 イメージの基礎心理学, 誠信書房
- 17) 田中道弘 2005 自己肯定感尺度の作成と項目の検討, 人間科学論究, 13, 15-27.
- 18) 岡田節子・齋藤友介・中嶋和夫 2001 保育士の職場環境ストレス認知尺度 保育学研究, 39, 209-215.

#### 付記

研究の趣旨や方法に賛同と理解を示し、調査にご協力いただきました学生方、データ入力を引き受け共に学んだ研究室の学生の皆様に厚く御礼申し上げます。

